

# IAMSCU 会議に出席して

大学院国際マネジメント研究科教授

井田 昌之

IAMSCU (International Association of Methodist Schools, Colleges, and Universities) は、青山学院が加盟しているメソジスト関係教育機関の国際団体である。米国メソジスト合同教会の GBHEM (General Board of Higher Education and Ministry) を母体として



IAMSCU 国際会議にて基調講演 (筆者、2005年7月)

ている。ジンバブエ (アフリカ) にあるアフリカ大学をはじめ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、南北

アメリカなどの広範な地域の約三〇〇校の組織で、米国では、ボストン大学、シラキュース大学、コーネルカレッジ、デューク大学などの東部の大学にはじ

まり、中部、西部にも多数の学校がある。日本においては、二〇弱の教育機関が関係校といえる。運営は「Board of Directors」を意思決定機関とし、米国メソジスト合同教会もその中に一員として入っている。なお、校友の Ken Yamada 氏が長年にわたって大きな役割を担ってこれていることを特記したい。また、二〇〇五年七月までその設立から青山学院深町正信院長がボードメンバーとして尽力されてこられた。

## IAMSCU 国際大会

二〇〇五年七月にオーストラリアのウエストミンスターズスクール (アデレード市) で開かれた国際大会は、グローバルイニシアティブがキーワードとしてとりあげられていた。フラット化する世界の中での人間の交流と多様性の中での伝統の維持と対話が基本的なテーマであると感じていたので、インターネットとITがそれに対してどのようなかわりを持つかに関して基調講演を行った。数百名の参加者と交流することができたのは大きな収穫であった。なお、深町院長の任期満了に伴い、アジア地区のボード

メンバーとして井田が選出された。この大会については、深町院長が本誌「青山学報」二〇〇五年秋 (二一三) 号に記事を書いておられるのでそちらを参照していただきたい。

## ソウルでのボードミーティング

二〇〇六年七月にソウルで表記の会議が開かれ、出席した。運営上・財務上の報告、各地域の報告、今後の運営の討論などが行われた。たとえば、ブラジルそして南米での教育の根本的な課題、そして宣教との関連といったことも含まれる。単独のメソジスト教会ではなく、教派をまたがった合同教会をバックとしているオーストラリアの発言には、共感を覚えるものがあった。韓国内のIAMSCU関係学校との交流会では強い印象をもった。代表は言う、「宣教局との宣教協力はしたいが、われわれは教育機関であり、主務は教育にあり、他のあらゆる教育機関との中で位置付けが第一である」。これだけをとれば、宣教・伝道に冷たいようにもとれるがその逆で、国内外を問わず積極的な支援活動と献金をおこなっている事実があり、また、韓国内でのキリスト教の着実な広

がりがある。そして、社会的責任がある。これらを考えるに彼我の組織の実力の違いを実感させられた。もともと二週後の広島会議では日本での活動に光を見出した。

### IAMSCU 広島会議

広島女学院の西垣二二院長の一年がかりのご尽力により、表記の会議が七月二十七日から二十九日にもたれた。暑い日であったが、米国メソジスト合同教会を母体とする学校にとどまらずに、メソジスト関係学校が多数集まったことに、参加者および運営にあたった広島女学院に敬意を表し、また大きな喜びとしたい。広島女学院、関西学院、活水学院、鎮西学院、啓明学院、福岡女学院、静岡英和学院、東洋英和女学院、山梨英和学院、大阪キリスト教学院、宣教関係機関、青山学院（順不同）、そしてその名の下の大学・高校、ブラジルからの特別参加、GBHEMからDel Pino氏、Ken Yamada氏の出席があった。青山学院では、筆者のほかにも、シュー土戸 ポール宣教師、大村修文高等部部长、加納孝代女子短期大学教授が出席した。Del Pino氏（General Secretary, GBHEM）の主題講演、パネル討論と五つにわかれたの分団協議、そのまとめと総合協議がもたれ、活発な交流と意見交換が行われた。総合協議は加納孝代教授が司会をした。井田は、テクノロジーに関するパネル発議と総合協議後のとりまとめに立った。次回の会議がもたれることを皆が期待して終了した。

### 関係教育機関の国際連携のひろがり

これらを通して感じたことを、次の三点に集約してみる。

1. 各学校はその国での教育の使命を推進するために連携を模索している。つまり、各校は具体的な国際交流を求めており、交換留学や姉妹校提携など、その文脈でのIAMSCUへの期待がある。

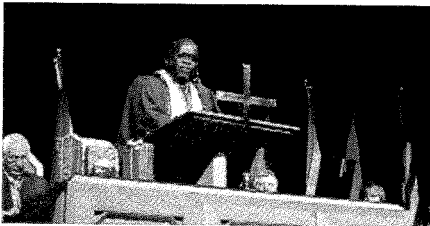
2. 米国メソジスト合同教会関連にとどまらず、連携の大きさと広がりを模索している。つまり、手を携えられる教育機関の広がりへの期待もある。日本では合同教会である日本基督教団との関係、キリスト教教育同盟との関係などもあり、その基点を探している。

3. 新しい時代への対応と伝統の維持という課題に取り組もうとしている。つまり、宣教・伝道の対象となる層のもつ意識を理解し、同じ目線に立つこと、地域的・歴史的な特質へ

の共同対応、文明的变化に対応する指針、これらへの共通認識の課題である。また、ツールとしてのIT活用への積極意見も多く聞かれた。特にホームページの活用には多くの発言があった。シュー宣教師は自身進められている教育上の取り組みについて紹介された。本質としての連携の必然性

伝統を守ること、さらに伝統の担い手を広げていくこと、これを積極的にやっていくには、ドアを閉じて保守的に行うのではなく、ドアを開けて多くの同労者と交流し、わかちあい、刺激しあうこともあると考えられる。そしてひとつひとつの現実と向き合う個性を培うことではないだろうか。個人についても、また組織についても言えよう。そして、「いたみを知るものであること」「恵みの中にあるものであることを知ること」「みずからの力を他に与えることの喜びを知るものであること」ここに出発点があると常々考えている。その意味で、原爆について、声高にはなく、具体的な資料に触れる機会がアレンジされたことも広島会議の成果であった。アジアにあることから来る課題も山積している。学校、教育機関のなすべき役割は多数あるが、「知識の伝達」「道を切り拓く力の醸成」「人間としてのあり方」の3つが注目すべきものであり、それらの課題への連携も重要である。

日本国内での連携と国際的な連携のビジョンがこれからもIAMSCUを基幹としてはぐくまれてほしいと願っている。



IAMSCU 国際会議 Murapa 議長 (2005年7月)



IAMSCU 広島会議にて (2006年7月)